

木工芸の神髄がここにあった

滋賀県と三重県の県境にまたがる鈴鹿山脈。豊かな森林と琵琶湖に流入する愛知川の源流地・奥永源寺工リアルには、日本中の木工芸家たちが聖地と崇める場所がある。小椋谷の最奥に位置する君ヶ畑・蛭谷という集落がそこで、ここに木地師の始祖、惟喬親王の伝説が残っている。

木地師とは轆轤で木を削り、椀や盆などの丸物を作れる職人のこと。1200年ほど前(平安時代初期)、都を追われ、鈴鹿の山奥に移り住んだ惟喬親王は木の実の抜け殻を見て、木の椀を作ることを思い立った。法華經の巻物の紐の原理から手引き轆轤を発明し、その技術を人々に伝授したことから、木で器などをを作る木地師が誕生したという。この地には小椋千軒とたどえられるほどの大勢の木地師が住んでいたが、室町時代後半になると、良材を求めて全国に分散した。

小椋谷が木地師の故郷と呼ばれるのにはもうひとつ、理由がある。木地師は山の木がなくなれば、家族を連れて別の山に移住するなど定住民ではないことから、不当な扱いを受けることがあった。そんな木地師たちを保護するため、江戸時代、木地師を統括する支配所役所が小椋谷の神職者らによって運営されることとなつた。支配所役人は日本中の木地師を訪ね歩き、神社や宗門手形などを発行し、不確かだった身元を保証した。つまり、全国の木地師が小椋谷の氏子かけ帳や宗旨人別帳に記載され、小椋谷をルーツとする木地師集団ができるがあつたといふわけだ。

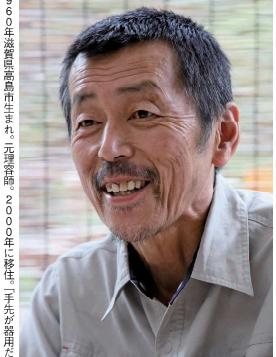
また御裏付と称して、どこの山でも8合目以上の木は自由伐採してよいとか、関所を通過せず、自由に通行できる特権も認められたといふ。

「木地師は移住にともない他所の土地の文化や風習を伝える役割をはたしたんです。また、山を熟知し



木地師(きじ)

北野清治さん



唯一無二、木地の魅力をもつと知つて

木地師の仕事は、まず原本木を吟味するところから始まる。昔のように地元の山から木を伐り出すことはほとんどありません。木材市場には全国の銘木が集まるので、そこで良材を仕入れます。ブナ、ケヤキ、トチ、サクラなどの広葉樹が主です。原木を見た瞬間、節や虫食い、スがあるのかないのか、どのような木目があらわ

山からの贈りもの 人と自然の調和が生み出す木工品



機械の機械に粗削りの木地を取り付け、スイッチを入れるとモーター・ベルトが連結し、木地がグルグル回転する。シェルシュルと音がいくつも見えて離さない。「自分の腕を磨き、孝えたものが形になりお客さまに喜ばれるのですから、こんな楽しい仕事、他にないと思います。体験教室をやっていると、幼い子供たちに出会うことがあります。将来、この世界に入らうたまでも、僕もまだ頑張らないといけません(笑)」

れるかが想像でき、完成品のフォルムまで絵が浮かんできます。作業工程として原本木から板を切り出し、糸鋸^{スズ}で八角形にします。轆轤で大体の形に粗挽きしたら、割れやひびを防ぐため、5~6年自然乾燥させます。その後、轆轤で仕上げの成形をします。少しでも鉋の刃の角度が狂うと、椀の高台などは吹っ飛んでしまうので、ここが一番の肝です。自分の腕を精密機械のようにならなく動かす必要があるため、慎重を要ります」

使用する鉋は数十種あるが、北野さんはこれらの道具類も自分で作るという。「鉄を打つ鍛冶もやります。自分で作るから手に合った道具を作ることができ、修理もやりますね。轆轤で木を削る一連の流れで鉋の刃を研ぐので、刃はいつもシャープです。切れ味が……などと悩む余地はありません」

木地師は木地の製作までが職務で、漆塗り職人と分業されることが多いが、北野さんは塗りに至る全工程を手がける。「僕は轆轤も塗りも独学です。専門書を参考なんでも自分でやるようにしました。壁にぶちあつたときだけ先生に教えを乞い、修正しました。何度も頭を打ち苦労が多かったですが、自分も先生方と同じレベルに達していると錯覚するわけです。しかし、ふと氣づくと、自分の作品は先生方と張り合う水準ではないことを。課題が見えたときがアマチュアからプロになる境目で、そのときから少ししづつ作品が売れ出しまし

た。この仕事は木の風合いをもつとも活かせる方法を考え、それを形にし、喜んでもらうことが勝負どころだと思っています。同じ木地の作品はひとつもありません。使いやすくて丈夫をモットーに、木地師が生み出す伝統工芸の魅力を伝えたいですね」

ていたので歴史の大きな動きにも関係しましたね。室町時代の名僧蓮如上人の道案内や関ヶ原の戦い(1600年)では、逃走する島津軍に協力したという逸話もあります。昔の文献に木地師のことが頻繁に出てくるので、大学の先生が調べに来られますよ」と語るのは木地師発祥のお膝元、蛭谷の木地師、北野清治さんだ。

北野さんは代々続く木地師の後継者ではなく、23年前、この集落に1ターンした移住者だという。「高島市の駅前で理容店を構えていましたが、忙しすぎて子どもと向き合えない日々に虚しさを感じるようになりました。自分は木が好きなので自然のなかで子どもを育て、自分自身も成長したいと願い思い切って田舎暮らしを始めたんです。木地師に関する知識はまったくなく、山仕事をお手伝いやイス・テーブルの製作、大工仕事をやりながら生活をつないでいました。ところが20年ほど前、地元の長老が来られ、ここは木地師の故郷だから木地師の仕事をやってみてはどうかと、古い木工・轆轤をくださったんです。木工・轆轤を使ってみると決意したんです。蛭谷では何十年も木地師が途絶えていたので、たいそ喜ばれましたね」

北野さんは代々続く木地師の後継者ではなく、23年前、この集落に1ターンした移住者だという。「高島市の駅前で理容店を構えていましたが、忙しすぎて子どもと向き合えない日々に虚しさを感じるようになりました。自分は木が好きなので自然のなかで子どもを育て、自分自身も成長したいと願い思い切って田舎暮らしを始めたんです。木地師に関する知識はまったくなく、山仕事をお手伝いやイス・テーブルの製作、大工仕事をやりながら生活をつないでいました。ところが20年ほど前、地元の長老が来られ、ここは木地師の故郷だから木地師の仕事をやってみてはどうかと、古い木工・轆轤をくださったんです。木工・轆轤を使ってみると決意したんです。蛭谷では何十年も木地師が途絶えていたので、たいそ喜ばれましたね」